



TITLE:

3.研究会(Ⅳ 共同利用研究)

AUTHOR(S):

CITATION:

3.研究会(Ⅳ 共同利用研究). 霊長類研究所年報 1987, 17: 74-77

ISSUE DATE:

1987-09-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/163676>

RIGHT:

rootingなどの新生児の欲求に適切に反応できないことが多かったが、第二子では、生後第一日目から、適切に反応するようになった。(2)第一子では、母親がコドモを監視していないことがあったが、第二子では、常に監視しているようになった。(3)第二子の方が、母親が赤ん坊のnipple contactを中断することが多かった(対応2試料無作為化検定(片側) $0.01 < p < 0.05$)。

しかし、上記以外では差がみられなかった。これについて、志賀A-1群では、未産メスによる育児経験である子守り行動がよくみられるが、授乳は子守りでは経験できない。授乳と監視以外では、第一子と第二子の差がないことから、初産の母親も子守りを通してかなり育児経験を積んで、授乳以外の世話では、経産の母親と同じように対処できると考えられる。以上から、出産前の子守り行動が育児経験の一つとして、初産の母子関係に影響すると示唆できる。そこで、昭和62年度の共同利用研究では、コドモの社会関係と子守り行動を調査する予定である。そして、将来、そのコドモが母親になったときの母子関係まで継続調査することで、出産前の子守り行動をも含めた出産育児経験の役割を縦断的に明らかにしていきたい。

3. 研究会

ヤクニホンザル自然群の社会と生態の研究

日 時：昭和62年3月15日(日)～16日(月)

場 所：京都大学霊長類研究所

参加者：約80名

プログラム

1. オスメスグルーミングによるコミュニケーション

塚原高広(東大・理・人類)

2. ビジター・メールの繁殖戦略

David Sprague(イエール大・京大・理・人類進化論)

3. 瀬切川上流域のヤクザルの群れ構成と遊動

黒木一男(泰星高校), 好広真一(竜谷大), 増井恵一(京大・理・人類進化論), 大竹勝(日本モンキーセンター), 樋口行雄

4. ヤクザル骨形態の特徴

黒田末寿(京大・理・人類)

5. ヤクザルの保護をめぐる諸問題 — 共同討議

座長：丸橋珠樹(武蔵大・人文), 大沢秀行(霊長研), 上原重男(札幌大), 岩本光雄(霊長研), 東 滋(霊長研)。

討論者：岡安直比, 高畑由起夫, 古市剛史(京大・理), 三谷雅純(霊長研), 山極寿一, 浜田 穰, 稲垣晴久(日本モンキーセンター), 福田史夫(マカク研)。

世話人：東 滋, 河合雅雄, 大沢秀行, 渡辺邦夫

塚原はグルーミング・セッションの行動経過の分析から、群れ外オスと群れオスとの行動型のちがいを示し、これとオスの群れとのかかわりの履歴との関連を考察した。Spragueは交尾期のオスの群間移動の現象を整理し、その意味を考えようとした。隣接する3群でのメスの発情、群れ外オスとの交尾のおこり方(日程=時間分布)の詳細なデータをめぐって、群れ外オスによる交尾がメスの推定受胎日以後の有効でない交尾であるらしいこと、だとすれば、このような性行動の社会的意味、さらには、社会的性比が1:1に近いヤクザルの社会構造との関係、またこれが、ヤクザルだけに特有の現象か、ホンダザルと連続するものか、など集中的な議論が交された。

黒木は、中高度帯での群れの個体数、行動域の広さと遊動の特性など過去2年間の現地調査の新しい成果を報告し、黒田は、ヤクザルの野生群からの捕獲死亡個体の全身骨格標本にもとづいて、攻撃行動および事故にもとずくとみられる骨損傷がかなりの頻度でみられることを指摘した。

保護をめぐるっては、西部林道の拡巾計画と、猿害対策と大量捕獲の現状について報告討論がなされた。(文責 東 滋)。

ニホンザル社会の再考(近縁種との比較を含む)

期 日：1987年3月12日(木)～14日(土)

場 所：霊長類研究所会議室

参加者：約80名

プログラム

I. 採食生態

1. 採食行動を通してみたニホンザル社会

- 岩本俊孝(宮崎大・教育)
2. ニホンザルの採食行動—最適採食戦略の視点
中川尚史(京大・霊長研)
- Ⅰ. 個体群動態と群れの分裂
3. ニホンザルの土地利用
丸橋珠樹(武蔵大・教養)
4. 社会変動と個体群
大沢秀行(京大・霊長研)
- Ⅲ. 社会関係空間構造
5. ニホンザルのグルーミング行動の再考
室山泰之(京大・霊長研)
6. ヤクザルのオスの社会的共存—優劣と対等性
古市剛史(京大・理)
7. ヤクザル自然群における Take-over と α -female
岡安直比(京大・理)
- Ⅳ. コミュニケーションと文化
8. 文化伝播・進合理論のニホンザルへの適用
佐倉 統(京大・霊長研)
9. 野生ニホンザルの音声による個体識別とその動物社会学的応用
三谷雅純(京大・霊長研)
10. ニホンザルの交代的行動
樋口義治(愛知大・教養)
- Ⅴ. 順位・血縁・性行動
11. 志賀 A 1 群における雌の繁殖成功度の分析
長谷川寿一(東大・理)
12. 餌付け集団の変遷から考える—岡山県勝山
糸魚川直祐(阪大・人間科学部)
13. 順位・血縁の母子関係に及ぼす影響
田中伊知郎(東大・理)
14. 幸島群の血縁と繁殖成功度
渡辺邦夫・森 明雄・河合雅雄
(京大・霊長研)
15. ニホンザル幸島群におけるメスの順位
森 明雄・渡辺邦夫(京大・霊長研)
- Ⅵ. 社会構造
16. 箱根 T 群の特性 (Burton, J. J. 1986 を基礎に)
川村俊蔵(京大・霊長研)
17. 箱根 T 群の fission-fusion の機構と要因
福田史夫(マカク研)
- Ⅶ. 他のマカク類の比較社会
18. ブタオザルの社会
大井 徹(京大・霊長研)

19. カニクイザルの社会行動
小山直樹(京大・アフリカ研)
20. タイワンザルの社会
(知本温泉の群れ)
田中 進(マカク研)
(壟丁の群れ)
呉 海音(台湾大・理)
21. スラウエシマカクとそのロングディスタンス・コール
渡辺邦夫(京大・霊長研)
- 世話人: 川村俊蔵, 河合雅雄

30年をこえる歩みを刻んだニホンザル社会構造の研究を見直す目的でこの研究会は開かれた。個体識別に基づく長期継続研究の伝統を生かしながら、新しい視点の導入によって、採食・優劣・血縁・繁殖等とその社会構造に占める位置づけについて多くの見直しが行われた。行動生態学の発展とともにニホンザル社会学にも新しい潮流が生じてきたことを感じさせる研究会であった。なお、他のマカク類については未だニホンザルと比較できるだけの資料は少ないが、将来はマカクを通じた社会構造論が展開されるであろう。

第 16 回ホミニゼーション研究会

期 日: 1987年3月19日(木)~20日(金)

場 所: 京都大学霊長類研究所会議室

参加者: 約 70 名

共通テーマ: 「性差とホミニゼーション」

プログラム

3月19日

第 1 部 ホミニゼーション トピックス

I. 遺伝子のダイナミズム

司会 野澤 謙(京大・霊長研)

1. 矢尾板孝郎(京大・医)

「免疫系の多様性機構」

2. 丹羽太貫(広島大・原放医研)

「レトロウイルスの内在化からみた遺伝子の変化」

II. 化石をめぐる

司会 江原昭善(京大・霊長研)

3. 相見 満(京大・霊長研)

「ホミノイデア化石をめぐる最近の話題」

3月20日

第2部 性差とホミニゼーション

司会 大島 清(京大・霊長研)

1. 新井康允(順天堂大・医)

「脳機能の性分化」

コメント:久保田 競(京大・霊長研)

2. 野崎真澄(京大・霊長研)

「霊長類の生殖リズムと脳の機能的性分化」

コメント:松林清明(京大・霊長研)

司会 西田利貞(東大・理)

3. 乗越皓司(上智大・生命研)

「シャーマンのオスとメスの役割分担」

コメント:小山直樹(京大・アフリカ研)

4. 早木仁成(京大・理)

「チンパンジーの行動にみられる性差」

コメント:上原重男(札幌大・教養)

5. 古市剛史(京大・理)

「ピグミーチンパンジーの性行動と性周期」

コメント:森 明雄(京大・霊長研)

6. 渡辺 毅(京大・霊長研)

「ヒトの性差と家族の起源」

コメント:黒田末寿(京大・理)

ディスカッサント:植田信太郎(東大・理), 石田英実(阪大・人間)

世話人:江原昭善, 河合雅雄, 竹中 修, 渡辺 毅

霊長類の軟部運動器

日 時: 1986年12月20日(土)

場 所: 霊長類研究所会議室

参加者: 約30名

プログラム

1. 霊長類足根骨における諸靱帯の形態学

平本嘉助(北里大)

2. 霊長類の鳥口腕筋とその支配神経 — 原猿・類人猿をヒトと比較して —

小泉政啓(岩手医大)

3. エリマキキツネザルの肩甲上神経皮枝

児玉公道(金沢大)

4. 2種のサル(*M. fuscata* & *M. fascicularis*)のロコモーション差異について — 前肢にかかる筋力を中心に分析する —

藤野 健(都老人研)

5. 骨格筋線維のタイプとその機能 — ニホンザ

ル後肢の機能に関する組織化学的解析 —

鈴木 惇(東北大)

コメンティーター: 佐藤健次(東京医歯大), 本間敏彦(順天堂大), 川井克司(金沢大), 浜田 稔(JMC)

世話人: 木村 賛, 岩本光雄, 毛利俊雄

現在, 所内では比較的到手薄となっている軟部運動器に関して, 計画研究「運動器からみた霊長類の系統発生」の共同利用研究員の方々を中心として最新の研究を紹介していただいた。平本氏はニホンザル足部の靱帯の詳しい分布を述べた。小泉, 児玉, 佐藤, 本間, 川井の諸氏は筋とその神経支配の関係をさまざまな部位において調べ, 系統発生的検討を行った。藤野氏は筋線維の長さとしりから前肢筋の機能形態を論じ, 浜田氏がコメントを加えた。鈴木氏は筋線維組織化学からみた後肢筋の機能を解析した。総合討論のなかでは筋線維の神経二重支配, 筋と関節靱帯部へ行く神経が組になっているものなど神経との関係をさらに考える必要性が指摘された。(文責: 木村 賛)

霊長類の聴覚と音声

日 時: 昭和62年1月17日(土)

場 所: 霊長類研究所会議室

参加者: 約30名

プログラム

1. 生態学的コミュニケーション論の試み

三谷雅純(京大・霊長研)

2. 飼育チンパンジーの音声プレイバック実験より

佐倉 統(京大・霊長研)

長谷川寿一(東大・教養)

3. 霊長類の音声の心理言語学のアプローチ

正高信男(米国・NIH)

4. 霊長類の喉頭筋の筋繊維構成の比較

猪口清一郎(昭和大・医)

5. 言語機能の一側優位性について

亀田和夫(北大・歯)

6. ヒトの音声言語の進化の理解にむけて

小嶋祥三(京大・霊長研)

世話人: 小嶋祥三, 岩本光雄, 森 明雄, 松村道一

三谷は各種霊長類の生息環境の音響的特性が,

各々のサル類の音声レパートリーにどのような影響を持つのかを、特に森林、草原の相違から論じた。佐倉と長谷川は、多摩動物園で行なった主にパント・フートのプレイバック実験の結果を報告し、ビデオの映像を供覧した。特にグループ内の個体の声とアフリカで収録した声の比較を行なった。正高はアメリカNIHで行なった南米産のサルの音声知覚、発声にまつわる様々な研究結果を発表した。とくに音声による個体識別など大変に興味深い事実が示された。猪口はマカクやチンパンジーの喉頭筋の筋繊維構成について報告し、ヒトのそれとの比較をした。ヒトとチンパンジーでは大きな差がないという点は注目に値すると思われる。亀田は右耳-左半球優位現象について概説した。小嶋はこれまで3年間の計画研究、今回の研究会報告を踏まえて、ヒトの音声言語の進化について、聴覚特性、音声知覚、発声、声道の形状の面から論じた。そして再び計画研究を行ないたいとの希望が表明された。（文責：小嶋）

6. イヌに見られる食生活の変化に伴う咀嚼器官の変化

茂原信生（独協医大）

総合討論

座長 尾崎 公（日大・松戸 歯）

世話人：野上裕生，相見 満，瀬戸口烈司

戦後日本人の顎・歯牙の変異性の機能形態に関する研究会

— ディスクレパンシーの概念を中心にして —

場 所：京都大学霊長類研究所セミナー室
日 時：1986年11月29日（土）～30日（日）

I. ヒトの歯の側から

座長 幸地省子（東北大・歯）

1. ディスクレパンシーの成因としての進化と文化

井上直彦（東大附属病院）

2. 現代人におけるディスクレパンシーの世代差と地域差

伊藤学而（鹿大・歯）

3. ディスクレパンシーと咬合の未来

井上昌一（鹿大・歯）

II. 哺乳類の歯の側から

座長 尾崎 公（日大・松戸 歯）

4. ヒト以外の哺乳類にディスクレパンシーは認められるか

瀬戸口烈司（京大・霊長研）

5. 霊長類の下顎形態と適正な歯列の長さについて

金沢英作（日大・松戸 歯）